

活動名	団体名	プロジェクトC
	地域	広島県広島市
	代表者	世話人代表 真宅 成光
	支援金額	20万円
活動概要		
<p>原爆により壊滅した広島。廃墟の中、やっと灯った県民市民の希望が「広島カープ」でした。カープの活躍に今日を生きる力をもらった広島の人々の歴史は、ヒロシマ復興の歴史でもあります。</p> <p>しかし、カープ誕生から60年以上が過ぎ、球場も移転した今日、その歴史や人々の想いは次第に薄れてきています。そのため、プロジェクトCでは、日本唯一の市民球団とよばれるカープの歴史や、スポーツから生きる力を得た人々の想いを、未来を担う子供たちや広く県民、市民に語り継ぐことは、広島に住む人間の責務と考えています。ついでには市民とカープの関係を表す4つの物語(石本秀一物語、長谷川良平物語、津田恒美物語、カープ初優勝物語)を紙芝居化し、公民館・学校、その他の施設などで青少年を中心に幅広い人々に紙芝居を披露し、戦後の復興のシンボルとして広く県民市民に愛されたカープの歴史を知ってもらい、郷土広島の魅力の後世に引き継ぐ活動を展開しました。また、デジタル社会の今、アナログ文化の原点でもある紙芝居の魅力を知ってもらい、紙芝居を読む楽しさを味わってもらうために、これから紙芝居を読みたいと思う人を対象に「かんたん紙芝居講座」を開催し、紙芝居師の育成に努めました。</p> <p>◆実施時期  2011年4月1日～2012年3月25日 (紙芝居の上演:34回、JR広島駅南口愛友市場外)  2011年11月23日 (ひろしま紙芝居祭の開催:ハノーバー庭園及びこども文化科学館)  2012年1月21日～2月18日(毎週土曜日) (かんたん紙芝居講座4回、二葉公民館)</p> <p>◆参加人数  プロジェクトCスタッフ: 25名、(紙芝居の制作・上演)  紙芝居鑑賞者: 約1,550名  かんたん紙芝居講座受講生:25名</p> <p style="text-align: right;">参加総人員:1,600名</p>		



かんたん紙芝居講座



紙芝居「カープ初優勝物語」の作業風景



紙芝居「カープ初優勝物語」上演前



紙芝居「カープ初優勝物語」上演中

## ◆実施に伴う効果

全てがデジタル化されつつある今日、アナログ文化の原点でもある紙芝居の魅力が徐々にではあるが見直されつつあり、県内をはじめ中国地方でも紙芝居が復活しているようである。  
青少年にとっては、直接紙芝居師の話しを聞きながら、紙芝居を見る新鮮さを感じてもらい、また、中高年にとっては、古き良き時代の郷愁を感じながら紙芝居を見てもらっています。  
また、紙芝居を読む楽しみは、語りを覚えるのではなく、直接観客の反応を感じながら、紙芝居を読むことができるため、多くの人が紙芝居を語ることを望んでいます。  
また、カープの歴史を紙芝居と言う手段で披露することにより、青少年には大変理解し易く、カープへの新たな関心を抱く切っ掛けを与えているし、中高年には、懐かしい思い出として郷愁を感じながら、時には涙を流しながら紙芝居を見てもらっています。

## ◆苦労した点

今回の紙芝居作成に関しては、紙芝居の印刷、紙芝居木枠作りについては専門業者に委託したが、紙芝居のシナリオ作り、デザインの決定、紙芝居の絵描き、厚紙張り等は自分たちが行ったので、経費的には安価に出来たと思います。  
また、「かんたん紙芝居講座」は、二葉公民館と共催して実施したため、受講生の募集広告は、公民館だより等で行ったので当初20名の募集が、受講申し込みが当初予定を大幅に上回ったため最終的には25名の受講生を受け入れる事となった。更に、この講座は二葉公民館との共催事業として実施したため、会場使用料についても減免処置を受けることが出来た。外部へのPRについても、二葉公民館と連携して行事を企画しているため、公民館を通してマスコミ関係に資料提供をしているため、我々の行事をマスコミも積極的に記事にしてもらっています。また、我々の行事は、公民館だよりに掲載してもらっているため地域住民へのPRも充分に行われていると思われまます。  
紙芝居の読み手については、筋書、セリフはシナリオを見て語るもので、覚える必要はありません。また、観衆が目の前にいて、見ている人の雰囲気や直接、瞬時に紙芝居の読み手に伝わってくるので、ほとんどの人が紙芝居の読み手になりたいと言っています。一度紙芝居を読むとその快感は忘れがたいものになるようです。  
紙芝居の上演は、この一年で30数回に及んでいます。紙芝居上演は、イベントとして地域に大変溶け込みやすい手段だと思えます。

## ◆今後の課題・発展の方向性

デジタル社会の今日、アナログ文化の原点でもある紙芝居の上演は、子どもたちには最高に新鮮で物珍しいものに映る様です。一方、中高年にとっては昔懐かしい郷愁を感じるようであり、これからも紙芝居は静かなブームを呼ぶものと思われまます。我々プロジェクトCは、「カープと市民の物語 紙芝居化プロジェクト」を更に発展させるため、昨年「まち物語制作委員会(委員長:真宅成光)」を立ち上げ、カープに関連する紙芝居以外にも、その街・その地方に伝わる伝説や物語を紙芝居にして、広島の魅力として発信し加えて後世にその伝説や物語を伝えて行く活動も行っています。  
更に、津波と福島原発事故で壊滅的に被災した福島をはじめ東日本の復興を支援するため、東北地方に伝わる民話やいわれ、街の物語などを現地に入って聞き取りそれを紙芝居にして、我々が現地に赴き上演したのちその紙芝居を寄贈すると言う「東北まち物語100本プロジェクト」を立ち上げました。  
そして、2012年3月3～5日には福島県いわき市、二本松市、桑折町の仮設住宅5か所で紙芝居を上演し、現地の物語を紙芝居にした作品、10本を置いて帰りました。  
次回は今年の12月に行く予定で、目下地元の人たちから聞き取りを行いながら、次なる紙芝居の制作を行っています。

## ◆活動を終えての感想・意見等

「広島県民・市民は、カープを拠り所にして、戦後の窮極を乗り越えてきました。まさにカープの歴史は、広島復興の歴史でもあります。」との認識の下でカープ昔話の紙芝居を作成し広く一般の人々の前で上演してきました。  
その回数は、2008年12月の第一回から2012年3月時点で延べ100日以上になり、2011年4月から2012年3月の一年間でも延べ34日、上演回数は44回以上になります。  
また、紙芝居の語り部養成講座は、想像以上に盛況でした。最終日には、受講生全員が自分が選んだ一本の紙芝居を他の受講生の前で演じる講座でありましたが、それぞれ受講生は、思い思いの趣向を凝らした演じ方を披露して大変楽しそうであつたし笑顔が絶えませんでした。  
そして、この度の東日本大震災に際し、我々は東北地方に伝わる民話や、伝説、まち物語を現地に行って聞き取り、紙芝居にして現地で上演し、その紙芝居を地元へ寄贈してきました。  
東北での紙芝居の上演は、地元の紙芝居を上演すると共に、広島カープ昔話の紙芝居も復興のシンボルとして、東北地方の人々を勇気づけるきっかけになればとの思いを込めて上演した。  
たかが紙芝居であるが、されど紙芝居である。益々デジタル化される社会の中で、今後も紙芝居文化は廃ることなく人々の心の中に入り込んでいくものと思っています。